

もくじ はい、文化財係です 9 見沼代親水公園駅のミニ展示 1P
じ 昭和三十五年頃の東洲江小学校 三 2P 行政文書に見る足立区の水害記録 (四) 3P

足立史談

第 615 号

2019 年 5 月 15 日

足立区立郷土博物館内
足立史談編集部

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

T E L 03-3620-9393

F A X 03-5697-6562

(30-309)



はい、文化財係です 9

見沼代親水公園駅のミニ展示



新しくなったミニ展示
郷土の歴史と文化財の魅力を発信します。

文化財係では、平成二十年三月から東京都交通局のご協力を得て、日暮里舎人ライナー見沼代親水公園駅の改札内において、ミニ展示を行っています。見沼代親水公園駅は、舎人二丁目目所在しており、舎人は古くからの歴史がある町です。駅の工事に伴い発掘調査も行い、その関連で「舎人遺跡 ―足立区最古の村―」と題して、古墳時代の舎人遺跡から発見された井戸跡の説明や土器などを展示してきました。同じように、工事による発掘成果や出土遺物を駅に展示する例として京都市営地下鉄東西線二条城前駅があり、現地の歴史を伝える効果的な手法として知られています。

この度、ミニ展示コーナーを、地域の歴史全体に広げ、「見沼代親水公園駅周辺の歴史と足立区の文化財紹介」と題し、古代から近代までの舎人についての展示に替えることとし、三月二十七日にその作業を行いました。

古代では、舎人村の長者の息子と毛長姫の婚姻にまつわる悲劇についてご紹介しています。毛長姫は毛長川の対岸の新里村（にっさとむら・現埼玉県草加市）の長者の娘で、嫁ぎ先とうまくいかなくなってしまい、毛長川に身投げしたと伝わっています。

中世は、戦国武将の舎人孫四郎の

武勇譚（ぶゆうたん）をご紹介しています。舎人孫四郎については、現在、郷土博物館の展示「戦国足立の三国志―宮城氏・舎人氏・武蔵千葉氏―」でくわしく取り上げていますが、戦国武将として有名な太田資正の窮地を救ったと伝わる人物です。

近世では、舎人宿の歴史とゴボウ市についてご紹介しています。舎人は江戸時代になると、宿場町として栄え、月に六日、市が開かれました。近代になると市は開かれなくなりませんが、年末にだけゴボウ市が開かれるようになり、昭和四〇年代まで続けられていました。このゴボウ市を偲び、現在も舎人水川神社で舎人文化市が開催されています。

また、「舎人の歴史写真館」という昭和時代の写真を紹介するコーナーも設けました。ここでは、郷土写真家石塚満氏の撮影による見沼代用水で野菜を洗っている様子、ゴボウ市で値段交渉をしている様子、赤山街道の工事現場の様子の三点の写真を展示しており、地域の変化をうかがうことができます。

足立区の文化財紹介では、郷土博物館に寄託されている古文書をご紹介し、舎人が戦国時代に重要な場所だったことを説明しています。

小さなコーナーですが、駅構内という多くの人々の目に触れる場所を活かし、今まで以上にこのミニ展示

を活用し、見沼代親水公園駅周辺の歴史や文化財について発信し、新たな魅力を知っていただきたいと考えています。

見沼代親水公園駅にお立ち寄りの際は、是非ミニ展示をご覧下さい。

(文化財係 学芸員 佐藤貴浩)

昭和二十五年頃の

東湊江小学校

その三(終)

渡邊梅子

昭和二十五年に新卒で東湊江小学校に赴任された渡邊先生のお話し、最終号になります。

【分校との運動会】

生徒数が増えて、東湊江小学校から昭和二十五年(一九五〇)三月三十一日、大谷田分校が誕生しました。(四月五日に授業が始まり、五月一日に足立区立大谷田小学校として独立します。)その当時、運動会は、本校、分校と合同で行うしきたりであったようで、その年の運動会も合同で開催されました。この大規模な運動会で、まず困ったことが、運動会開催可否の連絡です。開催当日、雨の降りそうな曇りの日は一番困ります。今のようにメール、電話等がなかつ

た時代ですので、広範囲に一齐に連絡する手段として、花火を連絡手段として使っていました。花火が上がれば、「今日の運動会は決行」の連絡になり、運動会が開催されます。中止の連絡が、花火が鳴らなかつたらという消極的な連絡方法で、うまくいっていたのか、今では少々心配です。

運動会は、娯楽の少ない時代ですから、村中の一大イベントでした。学校の校庭には、お年寄りが優先的に座って運動会を見学していただける特等席、今という敬老席があり、老若男女が運動会を楽しみました。この敬老席の考え方は、今では当たり前になった電車のシルバーシートより先に導入していましたから、ちよつと誇らしいですね。

【おゆうぎ】

今では、ダンスというところですが、当時は、「おゆうぎ」と言っていました。先生方にも「おゆうぎ」の知識のある方がいなく、学芸大にみんなで「おゆうぎ」を習いに行きました。楽曲は、当然レコードを使いますので、数少ないレコード屋さん、浅草まで目的のレコードを買いに行ったのを覚えています。分校でも、同じように準備を進めて練習を重ねていました。運動会が近づき合同練習を行ってみると大変なことが分かりました。右手を挙げる動作

は同じでも、前からあげる動作もあれば、横からあげる動作もあり、同じ楽曲の「おゆうぎ」でも少しずつ違うのです。運動会本番までの時間がないときに、全体練習を二回三回と行い、本番には綺麗な「おゆうぎ」に仕上がったことを思い出しています。

【徒競走】

普通、徒競走は、コースの線引きから一組六名で走りますが、分校との合同運動会ですので大人数です。とても一組六名での徒競走では、組数が増えて、決められたプログラムの時間通りに完結できません。事前検討する職員会で、一組八名で走らせてはどうかという意見が出され、この意見に一旦は傾きかけました。

(二組の人数を増やせば、走る組数は少なくてできる)すると、酒寄(さかより)先生(女性)が、「怪我を承知の上で一組八人を走らせるような学校には、私の子供は行かせません。」と、きっぱり発言をされました。この意見で職員会の雰囲気ガラリとかわり、安全に配慮した一組六名は維持しつつ、運動会その他の進行をみんなで工夫して時間



昭和35年ころの運動会

内にすべてを終了させる計画になりました。女性の先生の発言は、今では当たり前の発言ですが、その当時(男性の発言がより尊重される雰囲気)では、かなり勇気のいる発言だったように思っています。今では、男女関係なく女性もいろいろな分野で活躍されていますが、学校の女性の先生達は、今の時代を先取りする先駆者だったかもしれませぬ。(昔から強かった方が先生になったか、先生だから強くなったかは興味があ

るところです。

事前検討を経て徒競走は六人一組で行いました。全体時間の短縮の工夫の一つが、プログラムの同時進行です。運動場の中央（フィールドと呼ぶところ）では、息の合った「おゆうぎ」が行われ、外周では六人一組の徒競走が行われました。今のオリンピックでもこれに近いことが行われていますから時代を先取りしてしまいましたね。

【終わりに】

私には、とつても大事にしている仲間がいます。この年（八十九歳）になると友達も少なくなり寂しくなってきましたが、まだ遊びに誘ってくれたり、旅行に付き合ってもらえたりする仲間です。この仲間も七〇歳を過ぎていますが、付き合いの期間は六〇年を超えています。そうです、私が東洲江小学校で教師になつて初めてのクラスの子供たちとはまだ連絡を取り合っているのです。

民生委員として永年足立で活躍し表彰された清水千鶴さん、永年の消防団活動が認められた勲章をもらった三浦啓司さん、地域の子供の為にと学校警備をしている大浜仁さん、また、親兄弟の介護のため大谷田に帰ってきた人、足立を去った方々も、遠くは鎌倉、千葉からも集まってくれます。みんな足立、大谷田を愛する人たちの集まりです。

この仲間たちとのつながりは、私の一生の宝物ですし、私を含めてこの仲間たちを育ててくれた大谷田の町、足立区に感謝しています。

人情みが溢れ、人との繋がりを大事にしていく大谷田、足立区の風土がいつまでも続いてくれることを祈っています。

さあ、大好きな東洲江小学校の校歌を歌いましょう。

♪-----

みどりの路にひらく門

朝日にはえてならぶ窓

友と文読む学校に

仰ぐはたのし富士の山

♪-----

(終)

元東洲江小学校教員

行政文書に見る

足立区の水害記録 (四)

山崎尚之

■「荒川出水々量調 附日誌」(二)

(明治四〇・一九〇七年八月) 二十九日は堰(いり・川に水を排出する水門)の開扉などをめぐり問題が起きました。三丁目堰(現在の東武堀切駅地先の荒川河川敷内)を午

後二時に開扉しました。同時刻に東京府の内務部長と南葛飾郡長が、南足立郡長に面会に来ます。そこで牛田堰(隅田川から現在の足立郵便局西側をとり東武線牛田駅西側あたりにあった堰)の傍らにあった茶店(堰の開閉の管理もしていました)で開閉の相談をしました。午後三時には東京府知事が「綾瀬ノ切所」(綾瀬川の決壊場所)の巡視に来ます。また、南葛飾郡の村長たちが堰の開扉について申出をしてきました。牛田堰と三丁目堰を開扉するにあたって、東部の減水の状況を南足立郡役所の職員は観測しました。

『読売新聞』八月三十一日条には、「北千住一円は水に浸さる、であったらうが、幸いにも昨日は増水せず只一昨日の水が其ままだブダブ溜って居る。只此上は各所の水門を開いて此溜水を荒川に注いだなら忽ち濁水を一掃する事が出来る。然し此所の之を急速に実行する事の出来ぬ理由がある。と云ふのは若し各堤防の水門を開けば、荒川に注ぐ綾瀬川が逆流して折角赤羽工兵隊が昼夜兼行で築き上げた堤防が氾濫す

る恐れがあるので、此間に利害上の小波瀾が起つて、後藤郡長は百方調定に苦心して居る」とあります。ここに書かれている「各堤防の水門」というのが、「日誌」に見える牛田堰と三丁目堰などで(他にも千住地区には源長寺堰や元宿堰がありました)、これらの開閉を巡って南足立郡長と南葛飾郡長が相談していたということでしょう。

このように南葛飾郡長や村長たち



東千代千代橋大鉄ノ状況 (明治三十四年八月)

明治42年洪水時の牛堰(牛田堰)を写した絵葉書

が塚の開扉について相談したり申入れをしたりするのは、南足立郡にある塚の開扉が下流である南葛飾郡に影響を与えるため、つまり南葛飾郡の土地にさらなる浸水の危険が迫ることを防ぐため、と思われれます。南足立郡の住民としては、土地に溜まった水を塚(水門)の開扉で荒川(隅田川)に排水したい。しかし、南足立郡側で排水されるとその水が荒川下流域や綾瀬川を溢れさせて南葛飾郡内にさらなる浸水をもたらす危険がある。よって南足立郡長に塚の開扉について留まるように南葛飾郡長と同郡各村長は申入れをしてくる。このように洪水がもたらした水を排水するかしないかをめぐって難しい判断を迫られる立場に南足立郡長はあったと思われれます。

■花畑村嘉兵衛新田での村民衝突

この日はさらに、午後三時ころに花畑村嘉兵衛新田(現在の加平・北加平・西加平あたり)の土俵(土のう)の取り除きのことで衝突が起こったと、夜になって花畑村長から報告がありました。これに対して郡の職員と小石川の警官が派遣されました。これも『都新聞』八月三十一日条によると、綾瀬川から溢れる水を防ぐため嘉兵衛新田の農民が堤防に土俵を築いていましたが、土俵が築かれると西側の梅島村の堤防が溢れてしまうので、この土俵を取り除

こうとして村民同士の衝突が起こり、梅島村側に三十四人の負傷者が発生しました。衝突勃発の急報により千住警察署より警察官が派遣され(小石川の警察官も応援に出張しました)、妥協案を提示して仲裁したところ折り合いがついたため衝突は止み、それぞれの村から馳せ参じた人々も解散させられたということでした。同様な衝突事件はやや上流の内匠新田でも発生したと同新聞は伝えています。江戸時代以来の溢水をめぐる村同志の争いがここで発生してしまいました。

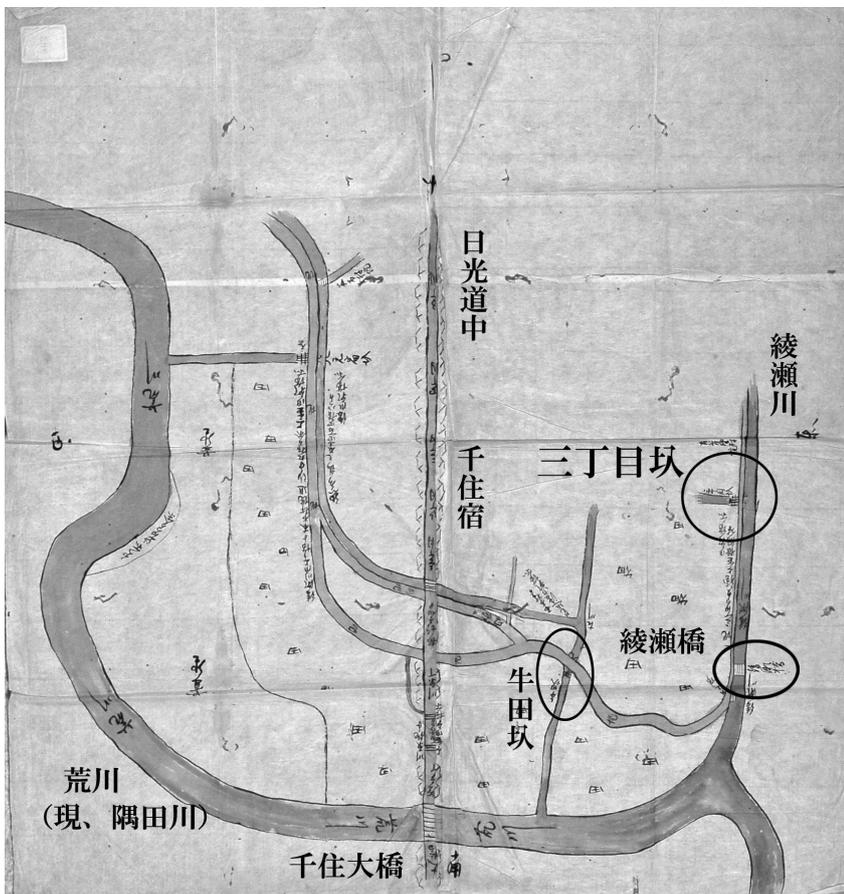
■洪水排出の押し問答

三〇日は朝から堤防切開き(堤防にある水門の開扉)を行うかどうかの問題に終始します。まず、富岡氏(履歴等不明)らと切開きのことを協議し、国の事務官にもこのことを申し出ます。そして、永野氏以下七八名が切開きのことと郡役所に行きつきます。また、東京府の職員が巡視に来たので切開きのことを伝え、佐々木東海(南足立郡病院長・町会・郡会議員)も来てこの件を話しています。さらに、内務省参事官が視察にやってきました。すると再び午後から深夜一時にかけて数回、永野氏らの一団が来て、「迫(ら)レ」ます。どうやら切開きのことを迫られたようでした。困惑した郡役所は、数回府知事へ電話して切開きのこと

を要請したようですが、深夜一時に至っても決定しないので、明朝に回答するということにして永野氏ら一団を帰します。この永野氏ら一団というのは千住の地元の住民で、千住地域の溢れている水を排水するため水門を開扉することを強く要求したのではないかと思われれます。深夜一時まで数回に渡って来るというのは、なかなか水の減らない状況に対して水門を開扉して排水しない郡役所に、相当に業を煮やしていたため

ではないかと思われれます。この後、南足立郡役所では渡船として使用していた十五艘の舟のうち七艘を返却したという記事があります。溢れた水で通れなくなった場所で人を渡すのに必要だった舟を返却したということは、水が少しづつ引いてきて、だんだんと舟を必要としない状況になってきたということでしょう。

(当館専門員)



関連する塚の描かれた絵図
江戸時代後期 高田家文書(当館蔵)